

(うち細胞診陰性化後再出現3例), 消失2例であった。中絶例は円切で微小浸潤癌と判明した。現状では受診の少ない若年者の頸癌検診において妊娠初期は絶好の検診の機会ととらえることが可能であるが, 細胞診と組織診の解釈と臨床的対応には十分な注意が必要である。

17 当院における ESD 後の組織学的 SM 癌症例の追跡調査

小林 和明・矢島 和人・加納 陽介*
石川 卓*・小杉 伸一*・神田 達夫*
畠山 勝義*・竹内 学**・小林 正明**
新潟大学医歯学総合病院光学医療診療部
新潟大学大学院消化器・一般外科
新潟大学大学院消化器・一般外科*
新潟大学医歯学総合病院光学医療診療部
新潟大学大学院消化器内科**

【背景】早期胃癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術 (ESD) 後の組織学的 SM 癌 (pSM 癌) 症例の追跡調査および外科追加切除例を検討する。

【対象】2003 年から 2010 年までに ESD を施行した早期胃癌 1003 名, 1075 病変中, pSM 癌 127 名を対象とした。

【結果】pSM 癌のうち経過観察となった症例は 72 名 (57%), 手術となった症例は 55 名 (43%) であった。うち当院での手術は 43 名であった。経過観察となった理由は SM1 のみが 49 名, リスクのためが 20 名であった。経過観察例の観察期間の中央値は 28 ヶ月で, 現在まで 1 名癌の再発で死亡した。当科切除例では内視鏡的根治度 B が 34 名, C が 9 名, 一方, 切除標本に癌の遺残を認めた症例は 1 例のみで, リンパ節転移は 4 名に認められた。

【結論】ESD 後の pSM 癌でのリンパ節転移率は高くない。経過観察もしくは手術を行うかの判断は多数例での検討が必要である。

18 化学放射線療法で治療した G-CSF 産生食道扁平上皮癌の 1 例

白井 賢司・矢島 和人・加納 陽介
石川 卓・小杉 伸一・神田 達夫
畠山 勝義・笹本 龍太*・青山 英史*
三浦 智史**

新潟大学大学院消化器・一般外科
同 腫瘍放射線医学分野*
長岡赤十字病院消化器内科**

症例は 60 歳, 男性。健診で白血球の異常高値 (19100/ μ l) を指摘。精査にて感染症や白血病は否定されたが, スクリーニングで行った上部消化管内視鏡で胸部食道扁平上皮癌の診断。血清中 granulocyte - colony stimulating factor (G-CSF) は 400 pg/ml 以上で, G-CSF 産生食道扁平上皮癌と診断された。臨床的 T3N2M0, Stage III であり, 標準治療に準じて導入化学療法として FP 療法を 2 コース施行。化学療法 2 コース後に白血球数, G-CSF 値はともに正常化し, 腫瘍は著明に縮小した。化学放射線療法にて CR が得られると判断し, 化学放射線療法を選択した。standard FP 療法に 60 Gy 照射を行い治療を完遂し, 画像上 CR を得た。G-CSF 産生食道癌は予後不良例の報告が多く, 本症例の遠隔成績が待たれる。

19 高度進行胃癌に対する術前 DCS 療法

松木 淳・梨本 篤・藪崎 裕
中川 悟・坂本 薫・丸山 聡
野村 達也・瀧井 康公・土屋 嘉昭

県立がんセンター新潟病院外科

【緒言】高度進行胃癌に対する Docetaxel, Cisplatin, S-1 の 3 剤併用分割 DCS 療法は奏効率が 80% 以上と高率で術前化学療法として期待される。高度進行胃癌 63 例を対象に, 認容性及び臨床成績を検証した。

【結果】Grade3 以上の有害事象は, 好中球減少 49.2%, 貧血 11.1% で, G-CSF を 47.6% に使用, 非血液学的毒性は悪心 4 例, 食欲不振 8 例, 下痢 3 例, 口内炎 1 例で, 13 例で薬剤を減量した。奏効率は 87.5% であった。手術は 48 例に施行, 術